

中国黄河流域の古代遺跡の立地環境

加藤 瑛 二*

I. はじめに

中国の太行山脈及び燕山山脈の山麓部においては古代遺跡が広く出現している。最近の中国の考古学研究をみると、環境考古学分野の論考が増大する傾向にあるが、地域的にも、なお、多くの考察を必要としている¹⁾。黄河流域における紀元前に相当する古代遺跡の立地をみると、いずれも内陸の丘陵地か山麓に立地する傾向にある。なぜ広大な華北の平野部に立地しないのであろうか。黄河の氾濫を伴ったにせよ、単なる水系の変化のみでは説明は不十分であり、黄河の氾濫地域以外の遺跡の立地についてはどのように説明が可能であろうか。世界の四大文明の発祥地ナイル・インダスの文明も内陸に属している。このような立地環境はいかなる理由によるのかが解明されなければならないであろう。

当概研究は黄河流域の古代遺跡の立地環境について、環境考古学的視点から実地調査を中心に考察したものである。論者はすでに中国の内陸黄河上流部、内モンゴル紅山文化地域、吉林省松花江地域の古代遺跡の立地環境について考察し、古代遺跡地が高位の地形に位置するか、あるいは湖水環境に富む地域に位置することを確認している。本稿では中国の黄河流域における古代遺跡の立地点に着目

し、中国内陸部・黄河の扇頂部・太行山脈山麓部・燕山山脈山麓部・天津地域に展開する古代遺跡の立地環境の実態について、地形と遺物との関係、特に貝殻遺物の出現について注目し、古代遺跡の立地傾向を明らかにすることを旨とするものである。

II. 中国内陸部の古代遺跡と地形環境

黄河源流に近い青海省宗日遺跡は仰韶(yangshao)期(7000-5000年B.C.)の遺跡であるが、黄河の現河床よりはるかに高位の高原の平坦地に位置する。砂礫段丘面がこの遺跡地を切っている。段丘面との差は約20mである。すなわち、仰韶期の遺跡の立地以後大きく侵食された地形を構成している²⁾。甘肅省の蘭州市青崗岔(qinggangcha)の馬家窯期の陶窯は河床より約100mの高位に位置している³⁾。青海省・甘肅省の多くの遺跡群も20-100mの高位の地形に位置することが確認されている⁴⁾。また、著名な西安の半坡(hangpo)遺跡群も台地に位置し、渭水平野を流れる渭水も漢代に大きく変化したことが確認されている⁵⁾。このような古代遺跡群が高位の地形面に存在することは何を意味するのであろうか。

甘肅省・陝西省一帯は黄土地帯である。脆弱な地層で構成され、極めて侵食され易い土壌であり、広域的な侵食によるガリーの発達

*名城大学

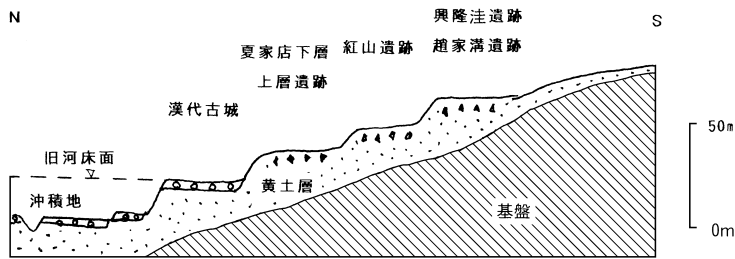
する地域である。これら高位の地形面に位置する遺跡群は、歴史的な侵食の結果と水系の変化によってとり残された遺跡群と考えることが可能である。

論者は内モンゴル赤峰市敖漢旗 (aohanqi) において古代遺跡と地形面の関係を追究した。第1図によれば、古い遺跡地は高位の地形面に位置している。ここに夏家店 (xiajiadian) 下層遺跡に属する大甸子 (dadianzi) 遺跡⁶⁾ が発掘されている。この大甸子遺跡面を切って 10 m の下位に段丘面があり、段丘面は現河床より 10 m の高位にある。したがって、この段丘面に過去の水系が存在したものと推定した。つまり、高位の地形面に属する遺跡群は地下水位の低下によって放棄されたものと考えた。

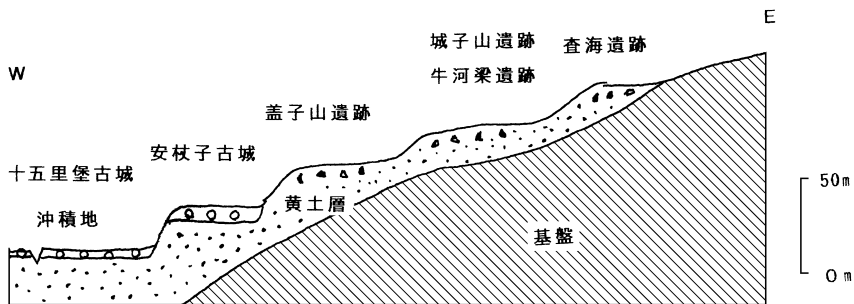
第2図は赤峰市の南側、ヌルフチ山脈の南部遼寧省に属する凌源市地域の地形概念図で

ある。ここでも敖漢旗地域と同様に古い遺跡が高位の地形面に発達し、新しい地形面は低位に位置している。遼寧省建平県五連城地域には明瞭に大きな砂礫を含む段丘面が確認されている⁷⁾。

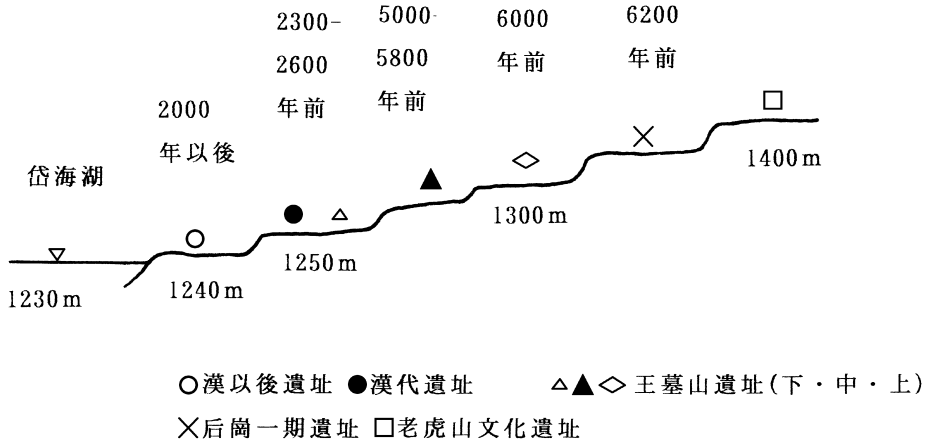
第3図は田彦金による内モンゴル岱海 (daihai) 地域の地形断面図⁸⁾ である。これによれば岱海湖の海拔 1230 m から 1400 m の位置に古代遺跡が立地し、老虎山遺跡から后崗一期遺跡・王墓山遺跡において 6300 y.B.P. ~ 5000 y.B.P. と年代が下がり、漢代遺跡は 1250 m、漢代以後の遺跡は 1240 m となっている。漢代遺跡は湖面より 20 m の上位に位置している。岱海地域では 6300 y.B.P. の水位を最高位とし、6000 y.B.P. に水位は突然降下したと推定している。このような内容は第1図・第2図で推論した地形構造及び遺跡の立地と殆ど一致しているのである。また、これ



第1図 敖漢旗地域の地形模式断面概念図



第2図 凌源市地域の地形模型断面概念図



第3図 岱海文化遺址高低図

(田彦金『環境考古研究第二集』2000年より作成)

らの地域は黄土地帯に属し、著しいガリーの発達する地形環境である。

したがって、黄土地帯においては古代遺跡の立地点は一般に古い遺跡は高位に、新しい遺跡は低位の地形に立地したものと判断される。

Ⅲ. 鄭州市周辺地域の古代遺跡の立地環境

黄河は三門峡を過ぎると丘陵地域を流下して鄭州市において平野部に移行し、北北西に流路を取る。ここで上流の土砂を堆積する。広域的な地形をみれば鄭州を扇頂とした扇状地を形成している。50 m の等高線をたどれば、明確に扇状の形態を示している。

河南省の古代遺跡は、鄭州の西南方に展開する丘陵地域に発達している。その代表的な遺跡に裴李崗 (Peiligang) 遺跡がある。仰韶期初期 (約 7000 年 B.C.) の遺跡である。この遺跡は標高 170 m の新鄭県の丘陵地の頂部に位置している。付近の集落は河川より離れ、

井戸の水位は地表より -34 m と乏水地域を形成している。新鄭県の南部に同時期の唐戸遺跡が存在し、この場所は標高 130 m の丘陵地に属する。新鄭県の県城には東周の鄭韓古城があり、河床 10 m の河岸に位置している。これら新鄭県の古代遺跡は標高 100 m 以上の丘陵地に立地し、黄河の氾濫に関係しない安定した地形環境上にある。

鄭州市の東郊の低地に大河村遺跡⁹⁾がある。仰韶期の後期 (約 5000 年 B.C.) の遺跡で鄭州の丘陵地の末端に位置し、前面に旧黄河の支流が流れていたものと推定されている。大河村博物館には発掘された淡水性の貝殻が陳列されている。遺跡地は、水文環境に富み漁労にも適した位置を選定したものと考えられる。また、鄭州市の埋蔵文化財センターにはこの地域周辺で出土した淡水性貝類が展示されている。

鄭州市の西部に杞 (qi) 県があり、鹿台崗・段崗遺跡が発掘されている¹⁰⁾。鹿台崗遺跡は仰韶期から春秋時代の遺物が層層化して出現しており、段崗遺跡は竜山文化期 (約 4200-

3600年 B.C.) から春秋時代の遺跡である。これらの遺跡から推定すれば、この地を占居した人々が長く同じ位置に居住したことが確認される。鹿台崗遺跡においては竜山文化期に属する発掘遺物中に貝殻器の刀6件、貝殻片14件、魚釣針・貝鏃等の出土が記載されている。杞県のこれらの遺跡地は平野部より数m高い微高地に位置している。

河南省安陽市は殷代の遺跡として著明な地域である。安陽市は標高50-100mの丘陵平坦地にあり、この地は東高西低の地形で安陽河を利用した古代遺跡が認められる。社会科学院安陽研究センターには出土した貝殻類が保存されている。

安陽市の北方に漳河が流れ、岳城水庫が建設されている。ここは、大行山脈から流下した河川が平野に移行する遷急点である。この地域の安陽丘陵を開析する地点には2-3段の小規模な段丘面が認められる。丘陵地は何回もの段丘化作用により侵食作用が進んだことが理解される。

安陽市の東南に濮陽(puyang)市がある。標高52mのこの地に戚城(qichen)があるが裴李崗文化遺物から明代までの遺物が層層化して出現している。これらは低地域における遺跡の立地を示すものと考えられる。

濮陽市は黄河にも近接し、黄河の氾濫を受けた地域とみなされる。市域の胡村郷に漢代の堤防と推定されるものが地下5mで発掘された経緯があり、黄河の支流が変化したものと同様にされる低湿地域である。濮陽県の濮陽故城は、周辺部に湖沼が多い地域である。新石器時代の西水坡(xishuipo)遺跡¹¹⁾においては埋葬された人骨を挟んで人頭大の竜虎図が発掘されている。この竜虎図はすべて貝殻

で画かれている。同様の虎形図は湖南省の辰溪県でも出土している。さらに、約7600年 B.C. に属する遼寧省の査海(shahai)遺跡には、岩石によって造形された竜図がある。

濮陽市の戚(qi)城は幅6m、深さ2.5-3.0mをなす二重の環濠で囲まれた城址である。戚城博物館には、この地域で集められた仰韶期から商代に属する20数種を越える淡水性の貝類が陳列されている。このような事例を考えれば、濮陽市地域においてはかなり広い範囲にわたって低湿地もしくは湖水環境が展開していたものと推定される。

IV. 河北省南部地域の古代遺跡の立地環境

河北省武安市には7300-8000年 B.C.の磁山遺跡¹²⁾が認められる。河川沿いに三段の低位の段丘が認められ、磁山文化の出現地は河床上約20mの丘陵地に立地している。現地の磁山博物館には、この地で出土した淡水性の貝類が陳列されている。

邢台(xingtai)市文化局での聞き取りによれば、市域の西部に商・周時代の遺跡をみるのが、東部地域には漢代の遺物は少なく、地下に埋没しているという。邢台東部は達活泉(達はいたるところの意味)・百泉の呼称があり、広く湖が形成されていたことが推定される。

石家荘市東部の藁城(gaoshan)市に隋代に建設された長さ64mの石造の趙州橋がある。水面からの高さ7.23mである。この石橋からみれば、隋代以降河川の水面は変化しただけで、橋を越えるような変化は予想し難い。しかし、藁城市の商代台西(taixi)遺跡¹³⁾には約3.25mの木枠の井戸が出現しており、

水位は現在より数m高かったものと推定される。台西遺跡の立地点は平野部より2 m程度高い微高地に立地している。また、河北省徐水県南庄頭の新石器時代早期の遺跡¹⁴⁾において貝類の出土をみる。保定市地域は昔は沼沢地が多く、塘地と呼称している。この地域は現在も白洋淀 (baiyangdian) に近接した河北の一大湖沼地帯が広がる低湿地である。

山麓に属する易 (yi) 県には燕下都が立地している。下都の城の高台は平地より10 m高く、この地区の水位は現在より2-3 m高かったものと推定されている。このような山麓に都城を築いたのは山麓部が水災害を避けられる安定した乾燥地であったためと理解されようか。地下水位の低下時期については、燕下都の建設以降の河流の変遷及び下刻によるものと推定される。

V. 北京市地域の古代遺跡の立地環境

北京市の南部に鎮江宮の遺跡¹⁵⁾がある。この遺跡は、拒馬 (juma) 河の右岸河床から7 mのところであり、山地の出口に相当する地点で下部に岩盤を形成するために、河川の侵食から残された残丘となっている。第1段丘は沖積段丘で、河床1-2 m、第2段丘の西側河床5 mの所に50-60 cm大の大礫を伴う小規模な砂礫面があり、過去の氾濫原の痕跡を残している。残丘上の地形面には唐代の古塔がある。この地形面の遺物には商一周代遺物の下層に約8000年 B.C. 相当の後崗一期文化の土器が出土している。河川に近く、居住に安全な位置を占めたものと理解される。

北京市北方の約7500-6000年 B.C. の平谷県上宅 (changzhai) 遺跡¹⁶⁾については、山麓

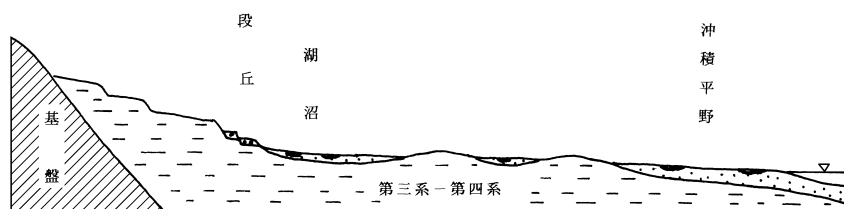
の第二台地上にあり、台地の凹地に第一層から第八層に分けられた文化層が出現している。上層は唐・遼代の文化層である。長期に渡って同一地点で使用された遺跡である。この遺跡では新石器時代の後期から晩期にかけて、台地の前面の低地は湖沼地域であったものと推定されている¹⁷⁾。密雲県の燕落寨 (yanlaozhai) に商代遺跡があるが、白河河岸よりやや離れ、数m前後高い平坦地に位置している。

VI. 唐山周辺地域の古代遺跡の立地環境

迁安 (qianan) 県に新石器時代に属する万軍山遺跡がある。青竜河を望む丘陵に位置しているが、下部は基盤で構成され、河床より30 m前後高い残丘である。青竜河は50 cm大の大量の砂礫を河床に堆積させているが、この遺跡は河川の水害には全く影響されない安全な位置に立地している。

豊潤県の高麗鋪 (gaolipu) に商代の遺跡地があり、この遺跡では、地層中より貝殻を数10個採取した。この時期の食用としたものであろう。この商代の遺跡地は、道路面より数m高く、周辺の地形はややローリングしている。深南 (luannan) 県の商・周代遺跡も集落地より4 m高い位置に立地する。これらの遺跡地は平野の中の小高い微高地を選定したものと考えられる。

薊 (ji) 県の水庫の南岸九百戸郷に新石器時代の清池遺跡がある。1997年に文化局により、3ヶ所で試掘されたが、この遺跡は砂礫を堆積した河岸に位置する。また、秦皇島市の昌黎 (changli) 県の遺跡は山麓斜面にあり、崖錐を含む傾斜地形上にある。これらの遺跡



第4図 華北平野の地形断面概念図

地は、概ね水災害を避けた地形を利用したものと判断される。

天津市武清県は標高 5 m、現海岸より約 65 km の内陸にある。泉水古城（漢代）に古井戸があり、瓦片が発見されている。古城はその後廃棄され、河川の氾濫で一部破壊されている。この地域の河川をみると、氾濫原に小規模な高まりを見るものの、段丘を形成していない。山地より流下した河川は谷口において小扇状地か二・三段の段丘を形成するが、平野に移行すれば河川は横に広がり、蛇行しながら微高地を残すことになる。第4図に示されるのが華北平野の地形断面の概念図である。

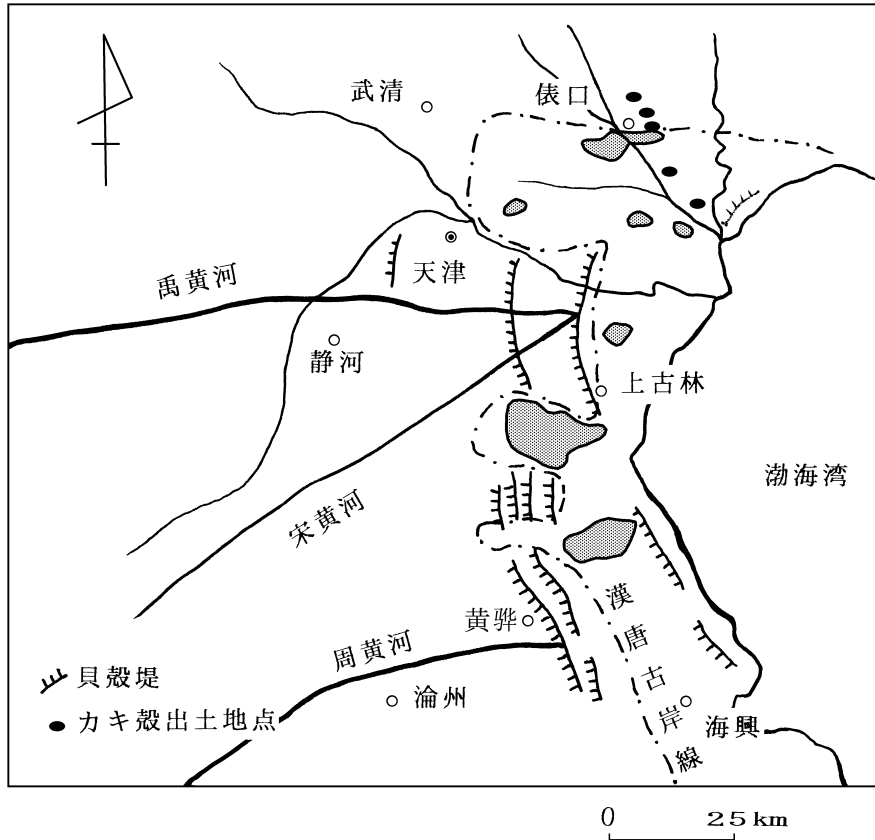
Ⅶ. 天津市の古海岸線と地形

天津市博物館¹⁸⁾ は過去の海岸線について考察し、何本かの貝殻堤から古海岸線を推定した。中国科学院海洋研究所¹⁹⁾ は華北平野の5回の海進を推定している。海興海進・黄骅 (huanghua) 海進・白洋淀海進・献県海進と滄州 (lunzhou) 海進である。堆積した地下の海成層からの比定であるが、これらの海進が地上の地形にどのように関連したかはなお考察の余地が多い。崔乾祥他²⁰⁾ は 5000 年 B.C. 以来の渤海東岸地域の古海岸線の変化を推定し、滦 (luan) 河デルタの地形環境の変

化について言及している。これによれば、唐山市—昌黎県を結ぶ南部に古海岸線があり、その後のデルタの発達と地形環境の変化が推定された。豊潤県高麗鋪の商代の貝殻層もこの海岸線と関連する一資料となる。

第5図は天津地域の古海岸線であり、隋・唐代の古海岸線が復原されている。この海岸線は衛星写真によっても多くの湖沼群と共に熊手状の古海岸線が形成されたことが認められる。天津博物館には海棲の貝殻が保存されており、大型の牡蛎類は北部に、小型の貝類は南部に分布したことが判明している。天津市上古林では海流によって堆積した厩大な小型の貝類が堀り出され、山積みになっている。その量は現地の観察で、推定数万トンに達する。

古海岸線を推定するとして、その背後の地域はどのような地形環境であったのであろうか。邢嘉明²¹⁾ は天津地域の沖積地の前面に広大な湖沼地を推定している。日本の縄文海進は松原彰子²²⁾ によれば約 5 m 高と推定されている。施雅風主編『中国海面変化』²³⁾ では黄骅の貝塚から推定される古海面の高潮位を東孙 (tonsun) 村で 3.03 m、古平均海水面を 1.93 m (6150 ± 65 y.B.P.) としている。したがって、華北平野における等高線 5 m 前後の地形は、古海進と関連する微地形が考慮されねばならないであろう。



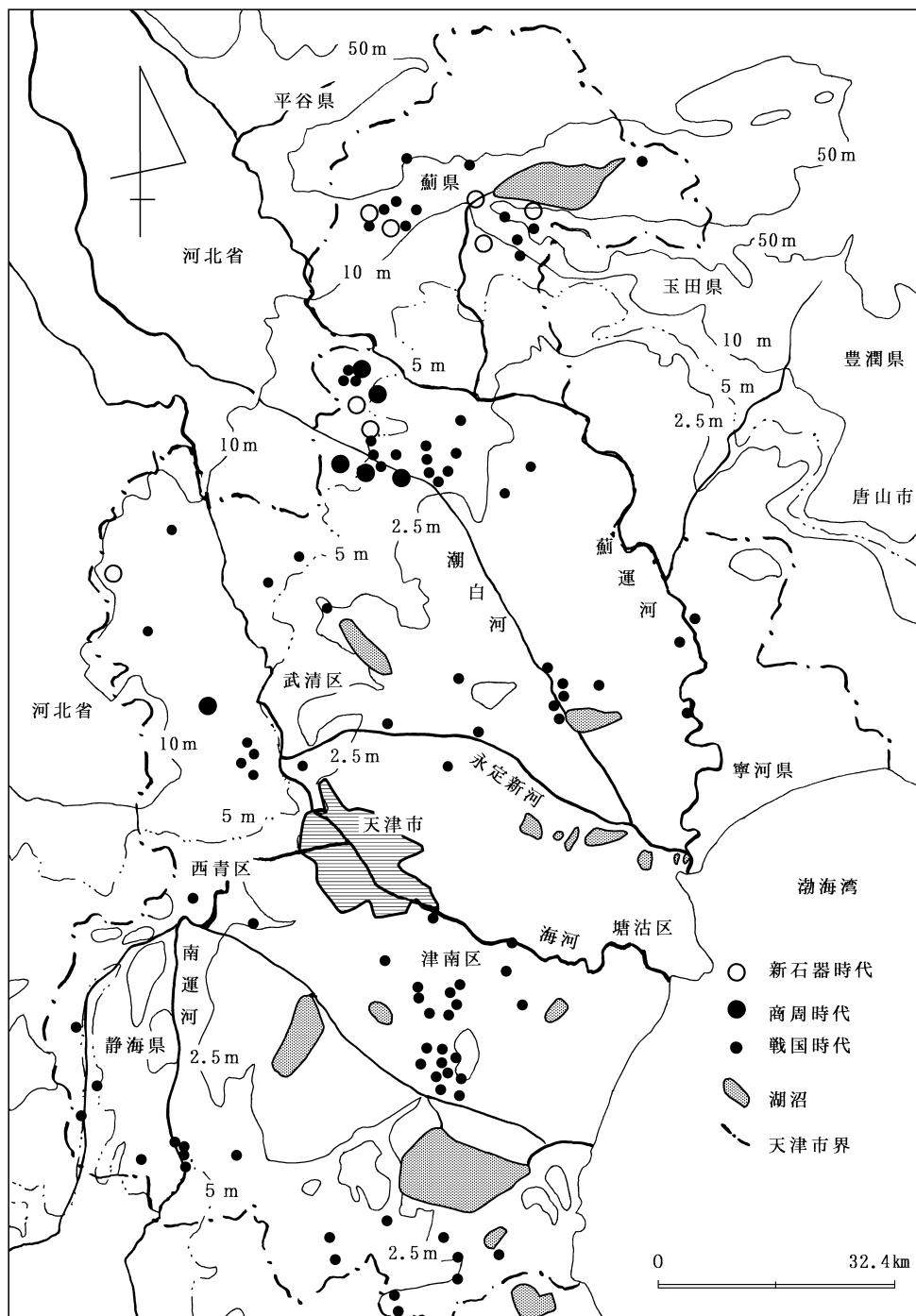
第5図 天津地域の貝殻堤と古岸線

(天津博物館資料より作成)

新石器時代の遺跡地は、天津市域で7ヶ所分布するが、北部に偏在する。商周代遺跡も北西部に位置する。これらの遺跡を第6図で見ると、ほぼ5m以上の地形に出現している。これに対して、戦国時代の遺跡は市域の広範囲に展開し、図には示していないが、漢代遺跡も同じような地域に出現している。天津市域は5m以下の土地が多い。この低地は遺跡地の分布からみて戦国時代以降に進出した地域と推定される。

VIII. 華北平野の貝類の出土地点

第1表は、華北平野における貝類の出土地点を示したものである。これを図に示すと第7図のようになる。河南省では鄭州・杞県・濮陽・安陽に、河北省南部で武安・邯鄲(handan)・邢台、中部で徐水・石家庄、北部で豊潤・唐山及び天津とほぼ華北平野の全域にかけて貝類の出土地点が認められる。山東省においては新石器時代に属する多くの遺跡地点で魚類・貝類出土の報告がある²⁴⁾。山東半島の海岸近接地点でも数多くの貝塚遺跡が確認されている²⁵⁾。



第6図 天津市の遺跡と地形

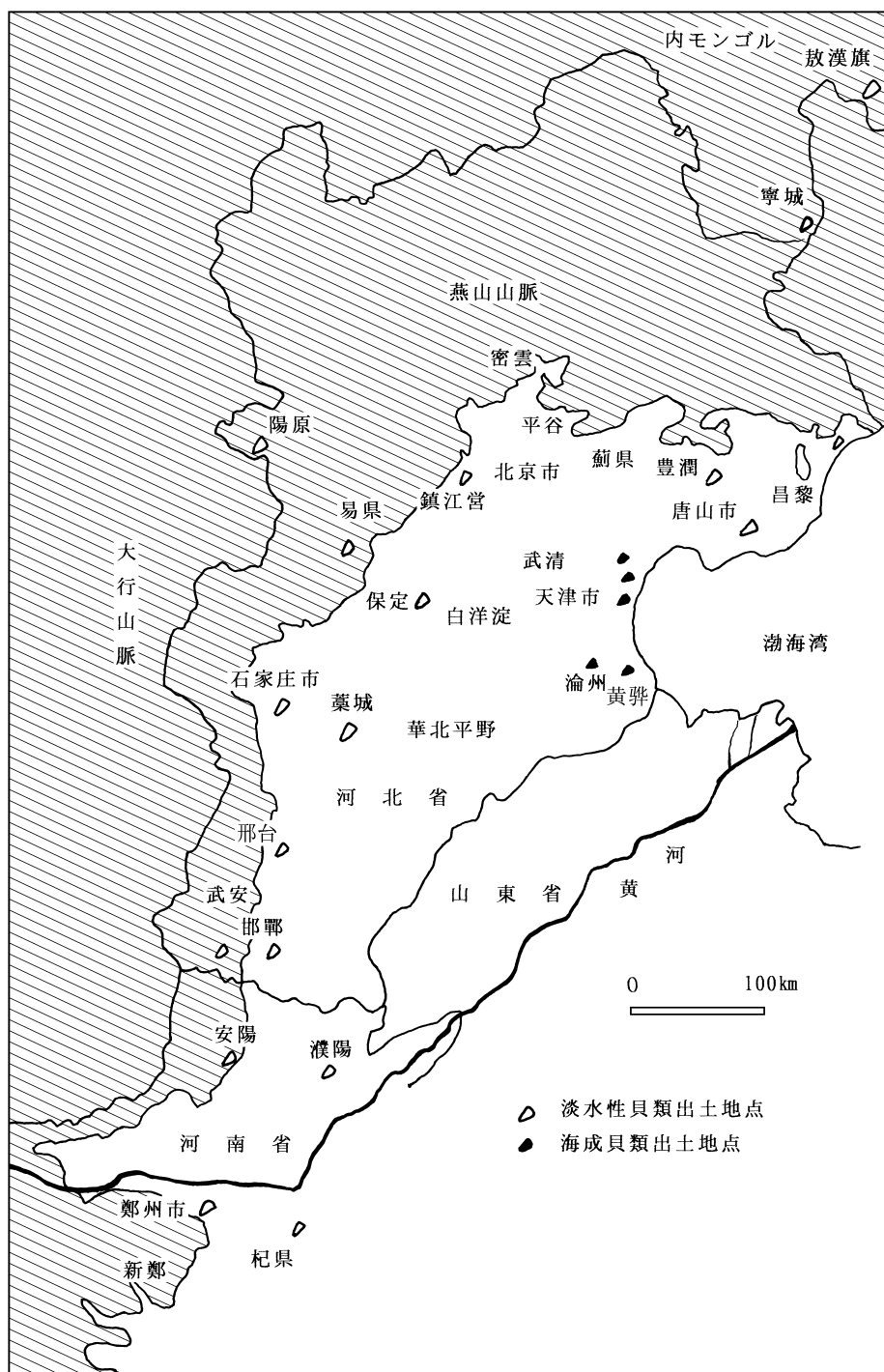
(国家文物局編『中国文物地図集 天津分冊』中国大百貨全書出版社 2002年より作成)

第1表 華北平野周辺の貝類の出土地

NO	出土地	時代	環境	形態・用途	数量・個	保管所・文献
1	天津市	戦国以降	海成カキ	自然堆積	大量	天津博物館蔵
2	天津市	〃	海成貝類	〃	〃	〃 11ヶ所考古 1965年2期
3	天津市上古林	隋—唐	海成小貝類	〃	厩大量	現地観察
4	鄭州市大河村	仰韶後期	淡水性貝類	貝殻	30 数個	大河村博物館蔵
5	河南杞県鹿台崗	先商文化	〃	貝鎌・紡輪	7 個	豫東杞県発掘報告 2000年
6	河南杞県段崗	春秋	〃	貝殻	10 数個	〃
7	河南濮陽西水坡	仰韶	〃	竜虎図	大量	中華第一竜 2000年
8	河南濮陽市	仰韶—商	〃	貝殻	多数	濮陽市博物館蔵
9	河南安陽后岡	竜山文化	〃	貝鎌・貝刀	4 個	考古学報 1985年1期
10	河南安陽市	商代	〃	〃	10 数個	安陽市文化財センター蔵
11	河南安陽北花園	商代	〃	食用	17 個	考古 2000年11期
12	河南林校	西周	〃	装飾品	大量	文物 1999年3期
13	河南洛陽	仰韶—竜山	〃	貝器	13 個	洛陽発掘報告 1986年
14	河南鄭州市	商代	〃	〃・貝鎌	数個	鄭州市文化財センター蔵
15	河南夏邑県	新石器—商	〃	貝器	比較多	考古 1997年11期
16	河北徐水南庄頭	新石器早期	〃	淡水性貝類	7 個	考古 1992年11期
17	河北石家庄市	仰韶—商代	〃	貝器	2ヶ所	文物資料叢刊 1977年1期
18	邢台葛家庄	〃	〃	貝器	2 個	三代文明研究—1999年
19	〃	春秋戦国	〃	貝器	6 組	考古 2001年2期
20	河北滄州	竜山・商周	〃	〃	多数	三代文明研究—1999年
21	河北滄県	竜山文化	〃	貝器	33 個	考古文集 1998年
22	河北陽原姜家梁	新石器	〃	装飾品	2 個	考古 2001年2期
23	河北峰峰北羊台	先商文化	〃	貝鎌	1 個	〃
24	河北永年石北口	新石器	〃	貝器	3 個	考古文集 1998年
25	河北磁山	新石器	〃	貝器	12 個	磁山博物館蔵
26	河北邯鄲市	新石器	〃	貝器	数個	邯鄲市博物館蔵
27	河北秦皇島市	商代	〃	貝殻	数個	秦皇島市志 1993年
28	河北唐山大城山	新石器	〃	貝器・貝殻	多数	考古学報 1959年3期
29	河北豊潤高霊鋪	商代	〃	貝殻	多数	現地観察
30	北京市拒馬河流	漢—戦国	〃	含貝殻土器	多数	考古 1989年3期 8ヶ所
31	北京市瑠璃河	周代	〃	貝刀・貝鎌	4 個	文物 1996年6期
32	湖南辰溪県	仰韶	〃	貝殻虎形図	大量	文物 2001年6期
33	内蒙古敖漢旗	新石器	〃	貝殻	10 数個	現地観察
34	内蒙古商都県	新石器	〃	貝器	5 個	内蒙古考古文集二 1997年
35	内蒙古大南溝	新石器	〃	貝器	120 余個	文物 1997年4期

さらに、河南省の洛陽、河北省の陽原、内モンゴルの商都県や赤峰市等、内陸地域にも淡水性貝類が出土している。特に赤峰市敖漢旗の場合は標高 530 m の高地である。現在の

乾燥地域からは到底推定不可能な環境にある。このような貝類の出現をどのように理解すべきであろうか。内陸地域においても、淡水性貝類が生息する湖沼地域が発達していた



第7図 華北平野の貝類の出土地点

ことを予想させる。

貝類の出現地域をみると、その多くは大行山脈及び燕山山脈の山麓部周辺に展開している。この山麓部は古代の主要な交通路に相当し、陸続きであったものと推定される。黄河は歴史時代に北流し、他の河川も渤海の低地に流下した。この流路沿いに幾多の湖沼地域を形成したものと考えられる。淡水性の貝類の存在はこれを示唆するものである。

華北平野の貝類の出土地点は第1表によれば、新石器時代7ヶ所、仰韶期5ヶ所、竜山期～先商時代5ヶ所、商代6ヶ所、周～戦国時代5ヶ所となっている。ほぼ各時代に出現している。これらにはなお多くの事例が追加されよう。このような事例から判断すれば、歴史時代を通じて華北平野は低湿な地域が展開し、湖水環境の豊かな地域であったものと推定できる。

なお、華北平野における各時代の遺跡の立地と微地形との関連は、詳細な平野の微地形分類図の作成が求められよう。

Ⅸ. まとめ

広域的な黄河流域及び華北平野の山麓部に位置する古代遺跡には、多くの地域で貝殻が出土しており、遺跡は丘陵地か微高地を選定して立地した傾向にある。このことは、古代遺跡の立地点が内陸立地であり、河川の水系の変化に関連しない高地に立地したことが確認された。特に仰韶期から商代（約7000年～3000年 B.C.）の古代遺跡の立地点は現在よりも水位が高く、極めて湖水環境に富んだ環境下に立地したことを示唆している。実地調査をもとに検討した結果、以下のようなこ

とが確認推定された。

① 中国内陸部の黄土地帯においては多くの平坦面が形成されているが、古い遺跡は上位の地形面に位置し、新しい遺跡は下位の地形面に位置することが確認された。この地域の地形はガリーが発達し、地下水位の低下によって遺跡地は次第に低下したものと考えられる。

② 河南省の丘陵地域における古代遺跡は標高約50-200 mに位置しており、河川の氾濫に対しては極めて安定した位置に立地している。

③ 黄河の扇状地においては丘陵地の末端か微高地を選定しているが、遺物に淡水性の貝殻が出土する事例が多い。

④ 河北省南部地域にも貝殻が出土するが、山麓部の前面は湖沼環境が卓越したことが推定される。

⑤ 河北省の唐山市から昌黎県にかけて古海岸線が推定され、その前面にデルタが形成されているが、この地域の古代遺跡は谷口の残丘かデルタの微高地に立地する傾向にある。

⑥ 天津市周辺においては海棲の貝類が出土し、古海岸線が復原されている。その背後のデルタは、河川の蛇行や湖沼に富んだ環境下にあったものと考えられる。

⑦ 内陸の内モンゴル赤峰市敖漢旗の標高530 m地点や内モンゴルの商都県、北京市の内陸の陽原にも淡水性貝類が出土し、古代遺跡地周辺において湖沼環境が展開していたものと判断される。

⑧ 華北平野においては古代遺跡の立地点が山麓部や平野の微高地に位置する傾向にあることは、貝殻の分布からみて遺跡の立地が

湖沼環境の影響を強く受け、地形的に制約された立地であったと考えられる。なお、沖積地域への集落の進出はその後の海退と、一般に商代以降の井戸の開発に伴うものと考えられ、天津市では戦国時代以後に 5 m 以下の地形面へ進出したことが確認された。

〔付記〕本論文は 2001 年度立命館地理学大会において発表したものをまとめたものである。なお、中国の現地調査において、鄭州大学韓国河教授には現地にて同行して頂き多くの指導を受けました。ここに深謝いたします。陝西省考古学研究所の王小蒙副教授には、行程中その他で格別の便宜を受けました。さらに中国各地の考古学研究者には有益な助言を受けたことを、紙上を借りて御礼申し上げます。

注

- 1) 邹逸麟主編『黄淮海平原歴史地理』、安徽教育出版社、1997。『淮河志』編纂委員会編『淮河綜述志』、科学出版社、2000。鄭州大学文博学院編『豫東杞県発掘報告』、科学出版社、2000。周混淑・宗豫秦主編『環境考古研究第二輯』、科学出版社、2000。『三代文明研究』編輯委員会編『三代文明研究（一）』、科学出版社、1999。候仁之主編『北京歴史地図集二集』、北京出版社、1995。これらの中には花粉分析・地層・地形・気候・災害・湖沼に関する内容を含めた環境問題に注目した論考がみられる。
- 2) 加藤瑛二「中国彩陶文化圏における遺跡の立地と陶窯の源流」、人間科学研究第 7 巻、1996、63-82 頁。
- 3) 同上、82 頁。
- 4) 同上、63-82 頁。
- 5) 段清波・周混淑「西安付近河道変遷与古文化分布」周混淑他編『環境考古研究第一輯』、科学出版社、1991、47-55 頁。
- 6) 中国社会科学院考古研究所編『大甸子』、科学出版社、1996、では大甸子をこの地域の一大集落跡と確認した。
- 7) 加藤瑛二「中国紅山文化地域の古代遺跡の立地環境」、名城大学教職課程部紀要第 33 巻、2000、1-27 頁。
- 8) 田彦金「岱海地区考古学文化与生態環境之關係」周混淑他編『環境考古研究第二輯』、科学出版社、2000、72-75 頁。
- 9) 鄭州市博物館「鄭州大河村遺址発掘報告」、考古学報 3 期、1979、301-371 頁。
- 10) 鄭州大学文博学院編『豫東杞県発掘報告』、科学出版社、2000、1-260 頁。
- 11) 濮陽市文物管理委员会他「河南濮陽西水坡遺址発掘簡報」、文物 3 期、1988、1-6 頁。
- 12) 華北省文物考古学会他編『磁山文化論集』、河北人民出版社、1989 年には 21 編の論考をみるが、43 頁に貝殻器が 12 個記載されている。
- 13) 河北省博物館他編『藁城台西商代遺址』、文物出版社、1997、2-5 頁。
- 14) 保定地区文物管理所・徐水研文物管理所「河北徐水県南庄頭遺址試掘簡報」、考古 11 期、1992、961-986 頁。
- 15) 北京市文物研究所「北京市拒馬河流域考古調査」、考古 3 期、1989、205-218 頁。
- 16) 候仁之主編『北京歴史地図集二集』、北京出版社、1996、39-44 頁。
- 17) 同上 16) に同じ。51 頁による。
- 18) 天津文物管理所『津門考古（天津）』、天津人民出版社、1982、5-11 頁。
- 19) 中国科学院海洋研究所『渤海地質』、科学出版社、1985、212-223 頁。
- 20) 崔乾祥・李鳳林・王強「据歴史文献及考古資料論証 5000 年以来渤海湾西、北岸海岸線變遷」（盖広生編『中国海平面變化』、海洋出版社、1986、所収）70-79 頁。
- 21) 邢嘉明・王会昌「京津地区自然環境演變及区域開發過程」、地理集刊第 18 号、1987、1-19 頁。同じ地域に別の湖沼變遷図の記載がある。邹宝山・何凡能「全新世以来京津地区自然水体的變遷」（候仁之編『環境變遷研究』、北京燕山出版社、1989、所収）22-42 頁。
- 22) 松原彰子「日本における完新世の砂州地形発達」地理学評論 Vol 73、No 5、2000、409-437 頁。
- 23) 趙希涛他「第二章 区域海岸演化与海面變化及其地質記錄」（施雅風主編『中国海面變化』、山東科技出版社、1996、所収）44-115 頁。
- 24) 高広仁・胡秉華「山東新石器時代生態環境の初歩研究」（周混淑編『環境考古研究第一輯』、科学出版社、1991、所収）40-142 頁。
- 25) 中国社会科学院編『胶東半島貝丘遺址環境考古』、社会科学文献出版社、1999、174-199 頁。



写真1 河南鄭州市大河村遺址
(大河村博物館蔵)



写真4 華北平野地形模型図
(天津博物館蔵)



写真2 河南濮陽市竜虎洞遺址
(濮陽戚城博物館蔵)



写真5 天津市上古林で掘り出された貝殻

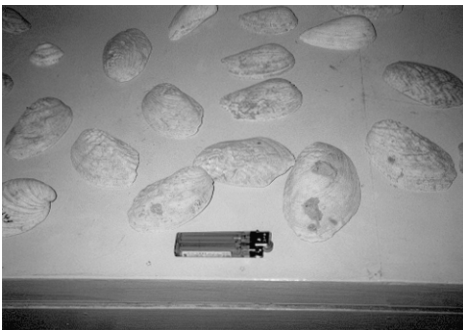


写真3 河南濮陽市の貝類の一部
(濮陽戚城博物館蔵)



写真6 天津市上古林の貝殻

The Location Environment of the Ancient Remains in the North China Plain

KATO Eiji*

Plenty examples exist to demonstrate the ancient remains built into the hill side in the North China Plain. The author, based on extensive on-the-site research, attempts to examine the following aspects.

1. In China's yellow soil areas of the inland, there are many flat plains. Generally speaking, earlier remains are located on the higher plains and later ones on the lower plains. Ravines were well formed in these areas. As the underground water level lowered along with the terrain, remains too are arrayed downwards the lower plains.
2. The ancient remains in the hilly areas of the Henan Province are located between 50-200 meters above the sea level, so that they would be protected when floods occur.
3. In the delta area of the Yellow River, the ancient remains are mostly located on the foot of the hill sides or other higher places. Fresh water shells were often found among the unearthed objects.
4. Fresh water shells were too found in the ancient remains in the southern part of Hebei province. We can therefore confer that there used to be many lakes and swamps around.
5. We can also confer that the area between the city of Tangshan to Changli county used to be the ancient co-a-st and a delta was formed in this location. Most of the ancient remains were concentrated in the hill sides or higher places of the delta.
6. The oceanic shell related objects were unearthed in the areas around the city of Tianjin. The ancient co-a-stal line has been restored. In the delta area, rivers and water ways crossed, and the watery and wetland environment was apparent.
7. Fresh water shells were also unearthed at the location of 530 meter above the sea level in Aohe town of Chifeng city, Inner Mongolia, in the city of Ningcheng and the county of Shangdu, also in Inner Mongolia; the same were too found in Yangyuan and the area near Beijing. Based on these findings, we know that rivers, lakes and swamps used to encroach quite into the inland areas where the ancient remains were located.
8. In the North China Plain, the ancient remains occupy the hill sides and higher plains. Looking at the pattern of the shell distribution, it is apparent that the location of the remains was constrained by the natural environment of rivers and lakes. In addition, after the Yangshao Culture period, the co-a-stal lines receded and, along with it, the remains moved towards the plains. After the Shang Dynasty, because of the sea level subsided, the remains of well-corps often accompanied the remains of residence.

* Meijo University